ローマ人への手紙第一回質問

（祈りながら考えよう）

1：15 ですから私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。

1：16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。

1：17 福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

（ロマ一章一五―一七節／新改訳2017）

（問一）ここでは福音の力について、どんなことを示していますか。パウロが最初のパラグラフと15節で、福音について述べていることも参考にしましょう。

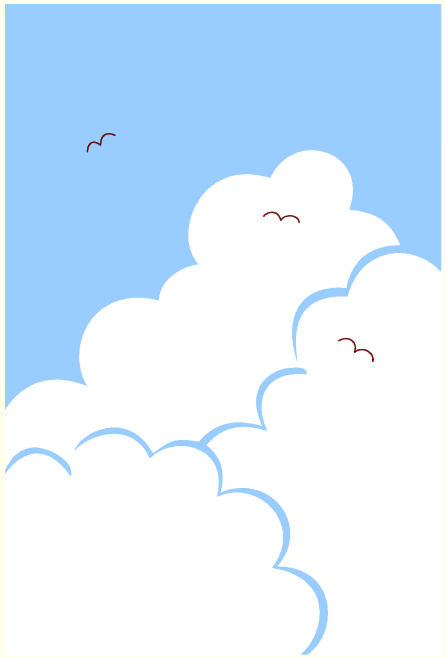
（問二）パウロが16，17節で述べているこの手紙の主題を要約して、自分の言葉で表現しましょう。

（問三）なぜパウロは、自分は福音を恥とは思いませんと言う必要があったのでしょう（Ⅰコリント1章22-23節参照）。

（問四）信仰は救いと義とにどんな関係がありますか。救いはどんな人のためにありますか。

〔注〕ここで「神の義」と言っているのは、キリストによって神が人のために備えて下さった義のことです。

グループ聖書研究（聖書を読む会の手引より）



救う神の力としての福音

（ロマ一章一六―一七節）

ここには、ローマ教会への手紙の主題がしるされています。それは、救う神の力としての福音です。今日、救いとか、福音ということばが安価に用いられている時、この手紙ではキリスト教で言う救いとか福音がはっきり示されていますから、これはまたキリスト教の基本思想であると言ってもいいでしょう。

パウロは、まず、「わたしは福音を恥とはしない」と申しています。これは、一見弱々しい宣言のように見えるかもしれません。なぜ、パウロはもっと積極的に「わたしは福音を誇りとしている」と言わないで、「わたしは福音を恥とはしない」と言ったのでしょうか。けれども、このような言い方

は、決して弱々しい言い方なのではなく、実は否定によって、事柄を強調して言う時に使われるものです。主が「あなたは神の国から遠くない」[1]とおっしゃった時、それは「あなたは、神の国のごく近くにいる」という意味であったのと同じように、パウロがこのことばをしるした時、彼は福音をどんなに高く評価し、それを語るのを誇りとしていたか分らないほどでした。

そればかりか、彼がこのことばを発した時、このことばはその前の節の続きとして語られているわけで、パウロがローマで福音を語ることの理由として語られていることを知ると、その関連において、パウロがこのことばを発しているということがわかります。パウロは以前エペソやピリピやコリントにおいて、福音を語っていたために、どんなにひどい目に遭ったかということを思いますと、ローマ帝国の首都ローマでこの福音を語ることに伴う苦難が目に見えるようであったはずです。キリストの十字架の福音に対する人々の反応は、軽蔑以外の何ものでもありませんでした。[2]ローマ帝国の首都においては、皇帝の権力があらゆる形で誇示されていて、それに対抗しうるものなど何一つないように見えました。そのようなローマに行って福音を語ることは、確かに人を気おくれさせ、恐れとおののきに包ませてしまい、福音を語ることに気はずかしい思いを抱かせることになりかねません。そうした背景の中にあって、パウロが「わたしは福音を恥とはしない」と語っていることを知りますと、彼の言葉には千鈞の重みがかかっていることがよく分かります。

この世の政治、経済、文化の力がどんなに強大であり、光り輝いているように見えたとしても、福音にはそれにまさる価値があることを、パウロはよく知っていました。「それは、ユダヤ人をはじめギリシャ人も、信じる人には、だれにも救いを与える神の力[3]だからである」と言っております。福音は、信じる者に救いを与える神の力である、というのです。ここに福音の価値がいかんなく言い表わされております。

聖書の提示する福音は、何であるよりも、まず「力」なのです。単なる教訓でもなければ、哲学や倫理でもありません。何かをする力なのです。しかも、それは「神の力」であると言われております。ですから、何かをすることができるわけです。それは、また「救いを与える神の力」であって、罪とその刑罰の中から救い出す神の力なのです。さらにそれは、「信じる人には、だれにも救いを与える神の力」であると言って、あるゆる人の必要に答えるものであることを示しております。

ここで、わたしたちは、救いが力であると言われていることに奇妙な感じを抱くかもしれません。どうして救いは神の恵みであるとか、愛であると言わないで、力であると言っているのかということです。恵みとか愛というのは、確かに救いの性格ですが、救いそのものではありません。どうして救いは力でなければならないのかと言いますと、わたしたちは罪を持っているからです。教えられるだけでは救われません。悪魔の支配下に置かれている人間は、悪魔よりはるかに強い力の持ち主である神の力によらなければ、救い出されないの

です。ここで「神の力」と言っているのは、そのような状態にいる人間を救うことのできる全能の神の力ということです。人が自分で自分を罪の中から救い出すことができないのと対比して、全能の神の力によって、わたしたちを救い出してくださることを表わしています。

この、人を救う福音は、「ユダヤ人をはじめギリシャ人も、信じる人には、だれにも救いを与える神の力」なのです。「ユダヤ人をはじめギリシャ人も」という言い方は、「ユダヤ人も、またその他すべての人も」という意味ですが、「ユダヤ人をはじめ」という言い方は、ただ単に時間的にユダヤ人が先だという意味だけではありません。彼らを通して、神は全人類を救うという計画をお持ちになっており、そのため、彼らは聖書を与えられ、キリストも血筋という点から見れば、ユダヤ人としてこの世に来られました。つまり旧約時代にあっては、ユダヤ人は、あらゆる民族の中で優位性を占めていました。けれども、今や新約時代においては、ユダヤ人でなくても、キリストを信じれば救われるわけで、全人類が信仰によって救われるようになりました。この本舞台が来るまでの準備段階とも言うべきものが、旧約時代だったのです。

信仰によって救いが与えられるということのくわしい説明は、この手紙の本論のところで述べられるわけですが、ここでちょっと触れておきたいことは、愛によって救いが与えられるのではなく、信仰によって救いが与えられるということです、愛によって救われるというのは、自分の行ないによって救われるということですが、信仰によって救われるという

ことは自分の行ないによるのではなく、神の恵みによって救われるということを意味しています。

さて、次にパウロは、この福音の本質について語ります。「それは、神の義が、その福音の中に啓示され、信仰から信仰へと至らせるからである。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりである。」これは、また救いの内容の性格について触れていると言ってもいいでしょう。ここで「神の義」が福音の中に啓示されていると言っていることは、注目すべきことです。信仰によって救われると言っていることから、当然予想されることは、神の恵みが福音の中に啓示されているということではないでしょうか。それなのに、神の義が啓示されているということは、どういうことなのでしょうか。実は、この神の義こそは、旧約聖書全体の重大なテーマであって、これをいいかげんにすると、聖書の思想が全くつかめなくなってしまいます。それほど重大な事柄なのです。ですから、このテーマはそれだけでも十分に研究する価値はありますが、ここではそれを研究すべき時ではなく、この個所でどう使われているかということに限定して、見て行くことにしたいと思います。しかしその前に、一言だけ言っておかなければならないことは、聖書は、この神の義という思想が根底にあるのであって、それがすべての基準だということです。つまり、救いについて考える場合にも、単に肉体の癒しとか、ご利益などということが中心なのではなく、罪からの救いということが、中心なのだということを覚えなければなりません。ですから、このローマ教会への手紙を見ても分

るように、まず罪の問題をとりあげ、次に、それからの救いとしての義認・聖化を取り上げております。

さて、「神の義」ということばは、それ自体、神の正義という場合にも、神の属性としての義という場合にも、神の御霊によって人の心の中につくり出される道徳的正しさについても使われますが、ここでは神の定められた律法の要求に対する人間の正しい関係を意味しています。もちろん、人間が自分の力によって神の律法を行なうことはできません。ですから、神は御子キリストを遣わして、キリストが十字架でわたしたちのために贖いを成し遂げてくださり、そのキリストを信じることによって、神との正しい関係を持つことができるわけで、それが福音にほかなりません。

この「神の義が……信仰から信仰に至らせる」とは、どういうことでしょうか。これは、神との正しい関係が、信仰によって始まり、信仰によって完成されることを意味しています。

信仰というのは、単に真理を知的に受け入れることを意味するものではありません。それは、神に従い、神に信頼し、神との人格的関係に入ることです。そのような神との正しい関係に入るということは、別に目新しいことではなく、実は旧約聖書の教えと合致するものなのです。全旧約聖書がそのことを教えているわけで、そのことをパウロはハバクク書二章四節のみことばを引用して、説明しています。「義人は信仰によって生きる。」

「義人は信仰によって生きる。」ということばは、また

「信仰による義人は生きる。」と訳すこともできます。[4] 協会訳の口語訳聖書、共同訳聖書は、そのように訳しています。しかし、旧約聖書のハバクク書の意味しているところは、「義人は信仰によって生きる」ですから、そのように訳すほうがいいでしょう。これは、イスラエルにカルデヤ人が侵略して来た時、国家的危機の中にあって、預言者ハバククが語ったことばで、主に拠り頼む者は勝利を得ることができるというメッセージでした。ユダヤ人は、いのちということばと、救いということばとは同義語に使っていますから、神に拠り頼み、神との正しい関係を持っている者は、いつも信仰によって救いの生活を始め、また全うすることができるというのです。

罪からの救いは、確かに神によります。人間にはできません。人生を破壊し、破滅に陥れる罪から救い出し、いのちある生活に入れるためには、全能の神の力による以外にはありません。わたしたちは、神がわたしたちのために企て、用意し、実行してくださる救いを体験させていただいた者として、この救ってくださる神を、心からあがめないではいられません。

注(1)マルコによる福音書一二章三四節。

(2)コリント教会への第一の手紙一章一八節。

(3)「神の力」(一・一六)と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、デュナミス・セウー(δύναμις θεοῦ)ということばが使われています。デュナミス(δύναμις)というギリシャ語は、そ

こから出て来ている英語のdynamo（発電機）dynamite（ダイナマイト）によってもわかるように、大きな力を表わすことばです。

(4)「義人は信仰によって生きる」（一・一七）と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、次のような文章になっています。ホ・ディカイオス・エク・ピステオース・ゼーセタイ（ὁ δίκαιος ἐκ πίστεως ζήσεται）。エク・ピステオース（ἐκ πίστεως）がその前のホ・ディカイオス（ὁ δίκαιος）にかかるのか、それとも、あとのゼーセタイ（ζήσεται）にかかるのかというと、それは、文法上どちらにも読むことができます。

尾山令仁・ローマ教会への手紙（ロイドジョンズ・ロマ書講解要約）より

J-ばいぶるGREEK 原書講読画面

ロマ 1:16

Οὐ γὰρ ἐπαισχύνομαι τὸ εὐαγγέλιον, δύναμις γὰρ θεοῦ ἐστιν εἰς σωτηρίαν παντὶ τῷ πιστεύοντι, Ἰουδαίῳ τε πρῶτον καὶ Ἕλληνι.

〈文法解析ノート〉 Rom 1:16

[1] οὐ **Οὐ** qn 不変）否定 ～ない

[2] γάρ **γὰρ** cs 接）従 なぜなら、というのは、すなわち、だから

[3] ἐπαισχύνομαι **ἐπαισχύνομαι**
vipn--1s 動）直現能欠1単 恥じる、恥ずかしく思う、恥じとする

[4] ὁ **τὸ**dans 冠）対中単 冠詞（この、その）

[5] εὐαγγέλιον **εὐαγγέλιον,** n-an-s 名）対中単 福音

[6] δύναμις **δύναμις（デュナミス）** n-nf-s 名）主女単 奇跡、力

[7] γάρ **γὰρ** cs 接）従 なぜなら、というのは、すなわち、だから

[8] θεός **θεοῦ** n-gm-s 名）属男単 神

[9] εἰμί **ἐστιν** vipa--3s 動）直現能3単 ある、～である、～です

[10] εἰς **εἰς** pa 前）対 ～へ、まで、のために、に対して

[11] σωτηρία **σωτηρίαν** n-af-s 名）対女単 救い

[12] πᾶς **παντὶ**
a--dm-s 形）与 全部で、すべての、どんな～でも、あらゆる、あらんかぎりの、1つも欠けが無い

[13] ὁ **τῷ** ddms+ 冠）与男単 冠詞（この、その）

[14] πιστεύω **πιστεύοντι,** vppadm-s 分）現能与男単 信じる

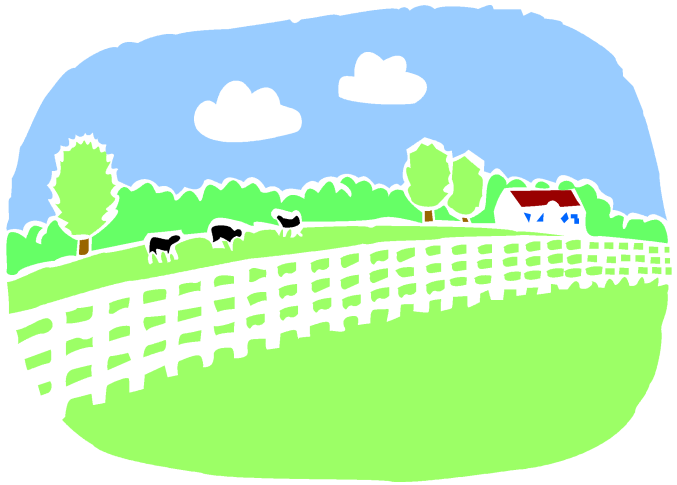
[15] Ἰουδαῖος **Ἰουδαίῳ** ap-dm-s 形）与男単 ユダヤ人の

[16] τέ **τε** cc+ 接）等位 でも～でも、それで、同様に

[17] πρῶτος **πρῶτον** abo 副序） まず

[18] καί **καὶ** cc 接）等 そして、～さえ、しかし、しかも、それでは、そうすれば

[19] Ἕλλην **Ἕλληνι.** n-dm-s 名）与男単 ギリシヤ人



J-ばいぶるGREEK 原書講読画面

ロマ 1:16

〈聖書翻訳比較ノート〉

【新改訳2017】私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。

【新改訳改訂3】私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。

【口語訳】わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。

【新共同訳】わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。

【LIB改訂】私は、この福音を少しも恥じてはいません。福音は、それを信じる人をだれでも天国に導く、神の力ある手段です。福音は最初、ユダヤ人だけに伝えられていました。しかし今では、すべての国の人が同じ方法で神のもとに招かれているのです。

【NKJV】For I am not ashamed of the gospel of Christ, for it is the power of God to salvation for everyone who believes, for the Jew first and also for the Greek.

【TEV】I have complete confidence in the gospel; it is God's power to save all who believe, first the Jews and also the Gentiles.

【KJV】For I am not ashamed of the gospel of Christ: for it is the power of God unto salvation to every one that believeth; to the Jew first, and also to the Greek.

【NIV】I am not ashamed of the gospel, because it is the power of God for the salvation of everyone who believes: first for the Jew, then for the Gentile.